

加藤丈夫著「私の本、私の生き方 - 人間関係の源泉は対話にあり - 」

Fole 2010年4月号 みずほ総合研究所刊を読む

1. もう 30 年になりますねえ。池波正太郎ファンになってから。今も変わらず好きですし、一生の友です。池波さんがお書きになった本と、池波さんについて書かれた本とでたくさんあるものだから、自宅の本棚一架分になってしまいました。最初は『鬼平犯科帳』から始まって、『剣客商売』に『真田太平記』……。映画や食べ物の話、旅行の話とか、エッセイもとてもいい。
2. 最近『池波正太郎の世界』という雑誌が、朝日新聞出版から週刊で出ているんです。あと 20 冊出るので、これが毎週の楽しみです。池波さんは今も割合に、若い女性から人気がありますよね。私は、女性が面白がって読むのは「本物」だと思うんですよ。女性っていうのは結構シャープに、感覚的にものを選ぶでしょう。
3. やっぱり代表作は『鬼平犯科帳』だと思います。私は会社で人事や労務、教育といった「人のかわり」について長くやってきたものだから、鬼平を中心にしたチームワーク、人間同士の強い結びつきは理想的だなあ、と。女性が池波さんを好きだっていうのは、そういう人間関係、リーダー像に惹かれるところもあるんじゃないかな。しかも同質の集団ではなく、いろんなキャリアをもった人たちが結びついている。チーム鬼平の、「お頭かしらのためなら」という雰囲気かが素晴らしいし、今の会社にいちばん欠けているのは、実はそういうものかもしれないですね。
4. 同じことが、野中郁次郎さんの『アメリカ海兵隊』にもいえます。野中さんは「暗黙知」で一躍有名になりましたが、もともとは富士電機にいらして、私の 3 年先輩。昔からすごく活発で仲間を大切にされる方ですが、以前、「暗黙知は、富士電機で加藤たちと仕事をしたときに感じていたことがベースにある」と、おっしゃったことがありました。確かに当時、私たちの職場には以心伝心というか、「言わなくてもわかってるだろ」って雰囲気かがありました。それが野中さんの組織論、学説のベースなんですね。
5. アメリカ海兵隊っていうのは、もともと“荒くれ者の集団”なんです。普段はだらしないけど、戦争になると真っ先に乗り込んで行き、軍のなかではいちばん強い。なぜ強いのか。そこには、「戦争で仲間が死んだときに遺体を置き去りにしない。どんなことがあっても、探し出して連れて帰る」という掟があるんですね。絶対に仲間を裏切らない。それが、海兵隊の強さだ、と書かれている。これ、チーム鬼平と同じですね。
6. 私の人生のモットーは、「対話が新しい価値を生む」。だけど現代くらい、対話がなくなっちゃった時代ってないなあと思います。家庭や学校、会社でもそう。現代社会で起こっているさまざま

な不祥事や問題も、突き詰めると人間同士の対話不足が原因ではないですか。

7 . 今ね、ときどきオフィスを見て回ると、やけに静かに感じることもある。昔はもっとワイワイと騒がしく、割とみんなの笑ったり怒ったりする声が聞こえていた気がするんですよ。会社に入って45年以上経ちますが、私は仲間といろいろやっているときがいちばん楽しかった。そういう点で、今の会社は面白みが減ってしまったようにも思えます。

8 . もう一冊挙げた『丸山眞男 音楽の対話』を書かれた中野雄さんは、経済人から音楽評論家になられた方。私はクラシック音楽が好きで、シーズン中は週1～2回聞きに行きますが、そのときの先生というか、指南役が中野さんなんです。ご著書を読んだり、お会いしてお話すると、自分が教養だと思って人に吹聴している知識というのがね、いかに浅薄なものかという感じがして。反省して、余計にまた面白くなるんです。

9 . 池波さんのように、映画や食べ物を楽しむ、ああいう生活がしたいなあという気持ちはありますね。本当なら今ごろそうになっているはずだったんですが(笑)。気が付くと、忙しいままでねえ……。

#### [コメント]

何をどのように読めばよいかをわかりやすく語った加藤丈夫(かとうたけお)氏のインタビュー記事。教養を積み重ねるとはどのようなことか、よくわかり有難い。

- 2010年3月21日 林明夫記 -